

# 曙光



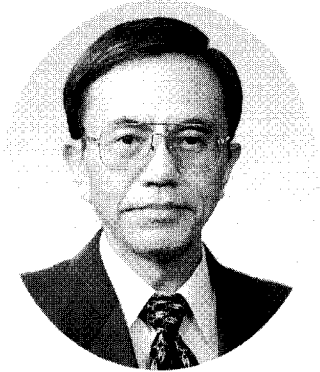
(しよこう)

2000.4.1  
東北大学大学教育研究センター広報 No.9



キャンパス風景

- 
- ◎これからの東北大生への期待  
東北大学総長 阿部 博之… 2
  - ◎荒城の月と三太郎の小径  
大学教育研究センター長  
星宮 望… 4
  - ◎全学教育と自分  
農学研究科教授 大久保一良… 6
  - ◎全学教育担当の思い出  
教養部の思い出と全学教育  
情報科学研究科教授 國分 振… 9
  - ◎全学教育科目の役割  
理学研究科教授 蟹沢 聡史… 11
  - ◎大学教育研究センターの紹介…………… 13  
(組織図)
  - ◎学生からの投稿  
文学部2年生 小山 美雪… 16  
工学部4年生 橋詰 浩明… 17
  - ◎電子化シラバス検索方法について…………… 18
  - ◎Clean Fresh Campus …………… 20



## これからの東北大生への期待

東北大学総長 阿部 博之

いま人類もわが国も大きい転換期を迎えている。転換しなければならない時期と言い換えた方がより適切であろう。

地球環境問題を例にとって説明する。20世紀は、地球環境問題が顕在化し、警鐘を鳴らし、多くの提案がなされた世紀である。しかしその解決は21世紀に先送りしてしまった。大量生産、大量廃棄に象徴される20世紀型の文明をどう変えていくか、まさに21世紀型の文明の構築が問われている。科学技術の新しい役割はもちろん不可欠であるが、それだけでは不十分であり、人文・社会科学をも含めた知の創造に全力を傾けていかなければならないのである。

特にわが国の場合は、いわば戦後の日本型システムから先進国型システムの脱皮が求められている。未来は、当然のことであるが未知の世界である。未知の世界を、知を創造しようとする活動によって予知していくことが、フロント・ランナーの仕事である。わが国にもフロント・ランナーがいなかったわけではない。むしろ多数いたというべきであろう。ただしそれらの知恵を結集し、活用するシステムの構築については無関心に近かった。戦後は未来を先導することに臆病であったからでもある。これまでの日本型システムは、いわゆるただ乗り論に通じるだけでなく、制度疲労が目立ち、産業競争力においても限界が明白になってきたのは知られているとおりである。このことは戦後の日本型システムを否定するものではない。その時代において大きい意義を有していたし、その長所は今後とも生かしていかなければならない。すなわち、米国型の追従ではなく、日本型の先進国型システムの構築なのである。

知の創造にもいろいろなレベルがある。最も先進のレベルをすべての日本人が担うわけにはいかない。スポーツの世界のように、選手層が必要であることを述べておく。

次にわれわれを取り巻く変化について、若干異なった観点から考えてみよう。その一つはIT (information technology) による変化であり、もう一つはボーダレス化である。

ITによるいわゆる情報通信革命の特色は、ネットワークによって個人が単位になっていることである。わが国が得意としてきた集団主義のメリットが大きく減少し始めているのはこのためである。中間管理職の仕事や存在が変化していくことを加速しているのは間違いない。ただし、知の創造や知

識生産に集団ないし組織がすべて不要であることを意味するものではない。なお、集団主義が確立したのは、江戸時代のしかも幕藩体制が強固になった以後の、歴史的に言えば比較的最近のことで、日本古来のものでないことは、何人かの学者の指摘するところである。

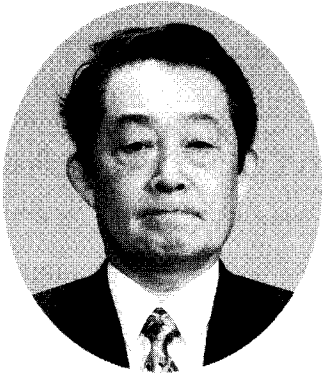
科学技術はもちろんのこと、金融にも本来国境はない。政策的に定められている国境も、その高さが低下してきている。このようなボーダレス化に伴って、諸外国の価値観がわが国の中に押し寄せてくる。国益をかけてのわが国への挑戦も少なくない。いわゆるグローバリゼーションである。わが国が依然として国内事情にのみ目を奪われ、国内にのみ通用する競争にうつつを抜かすことを続けていくなれば、グローバリゼーションによる負の面だけが蓄積され、敗者となることを覚悟しなければならない。

知の創造には高い専門性が需要である。知の創造をより広く知識生産に置き換えても、国際水準のプロの集団でなければならない。しかもその集団に属する個人は、他人にないプロとしての力をもっていることが要求される。

I Tは情報の普遍化や画一化に寄与するが、I Tイコール知の創造ではない。知の創造はあくまでも個人や小グループによる所産である。しかもそれらの所属する組織は、そのための企画をあらかじめ用意してくれることはないものと考えた方がよい。待っていても個人や小グループに対して組織は何もしてくれないのであり、個人や小グループが所属する組織にどんな貢献をするかが、より強く求められることになる。一方、組織の経営者は、優れた個人が別の組織に移ってしまわないような魅力ある条件整備に努力することになる。

I Tによって、地球上の様々な文化や地域の個性が喪失し画一化することは、決して望ましいことではない。高い専門性の必要性についてはすでに述べたが、併せて幅広い教養と科学的な判断力が強く望まれる。感情的な批判や判断は、一見その地域の文化や個性を擁護しているように見えても、長期的にみれば逆である場合が少なくない。長期にわたる友情の確立に努力しながら、様々な文化や地域の個性との共生を図っていくことも、21世紀の大きい課題である。

以上は、特に東北大生を対象にした期待である。人間の脳は、その成長過程の中で適切な時期に刺激を与えれば、機能が大きく増進するといわれている。受験勉強に向けた暗記の機能もその一つである。それとは別に、大学生の年代でなければできない勉学の重要性を強調しておきたい。



## 荒城の月と三太郎の小径

大学教育研究センター長 星 宮 望  
(大学院工学研究科電子工学専攻・教授)

新入生諸君、入学おめでとうございます。また、昨年度入学の諸君、進級おめでとうございます。皆さん、表題の「荒城の月」と「三太郎の小径」をご存じですか？ 多分、ほとんどの諸君は「荒城の月」の名曲を知っていると思います。作詞者が土井晩翠（本名：土井林吉）で、作曲者が滝廉太郎であることを知っている人も多いでしょう。では、土井晩翠が現在の東北大学の前身の一部であった旧制第二高等学校の教授（1950年文化勲章を受賞）であったことは知っていますか？ 荒城の月の作詞にあたっては仙台の青葉城を念頭においたといわれています。是非、青葉城跡を訪れて気宇壮大な、いにしへの武将の心意気や、土井晩翠の繊細な詩情などを偲んでみて下さい。

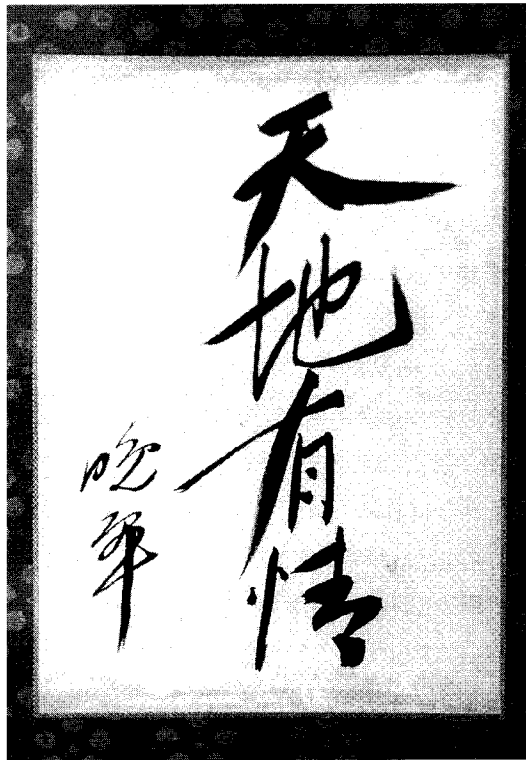
では、「三太郎の小径」はどうでしょうか？ これを知っている学生は少ないかもしれません。それでは「三太郎の日記」は読んだことがありますか？ 「三太郎の日記」は東北帝国大学が創設されてまもなくの大正11年に創設された法文学部の美学講座担当の教授であった阿部次郎先生の書かれた名著です。原稿は明治44年頃から大正3年頃にわたって書かれたもので、今となっては大昔の著書と言われるかもしれません。しかし、戦前・戦後をとわず永年にわたって大学生の必読書といわれてきた名著です。人生を真剣に考えること、若い魂の叫びというようなことを正面から取り上げた本として極めて高い評価を受けておりました。小生もちろん大学に入学してすぐに買って読み始めましたが、内容の高度なこともあって何度も挫折したことを思い出します。できれば若い学生諸君に読むことをお勧めいたします。しかし、残念ながら絶版になり、今では一般の書店では売っていないのが残念です。図書館で読んでください。この「三太郎の日記」を記念して川内キャンパスの図書館の東側の道路向かいに「三太郎の小径」が作られております。授業の合間などにここを散策して、大先輩の阿部次郎先生を偲んでみては如何でしょうか？ 阿部次郎先生のことについては、幸い、平成11年秋に、文学部の事業として「阿部次郎記念館」（青葉区米が袋3-4-29）〔TEL：267 3284〕が開館されましたので、ここを訪れることもおすすめします。ここには、「三太郎の日記」をはじめとして、各種の資料が展示されておりますので、是非、ここを利用して下さい。最近、東北大学出版会から刊行された「父 阿部次郎」によりますと、阿部次郎先生は、法文学部の文科系の初代教授を選考する際に重要な役割をにない、専門に局限しない全学的なひろい交わりを願って努力されたようです。そのため、多くの素晴らしい学者、研究者、教育者が集まった東北帝国大学の基礎が築かれたとも言えましょう。

現在の東北大学は理工系の学生定員が多いために、ともすると文系の特色があまり知られていない面があるかもしれませんが、ここに述べたことはほんの一端であって、多くの思想家、精神的な指導者・研究者などを輩出した大学であることを認識していただきたいと思います。

21世紀は、日本の財産である「頭脳」が国際的な競争の中心になる時代です。その時に、外国の例をまねするのではなく、自分らの判断で推進して行くためには、大学の1、2年の時に自己を確立することが益々重要になると思います。そのためには、若いこの時期に、真の教養とは何かを考え、自分の専門の知識だけでなく、広い視野で物事を判断できる素養を身につけていただきたく思います。

将来の諸君の大きな発展と成長をお祈りいたします。

最後に、土井晩翠先生の直筆の書（写真）を掲載いたします。これは、たまたま、小生の父（88歳で小生宅に同居中）が旧制第2高等学校の学生時代に土井晩翠先生から直接いただいた書を表装して、私の自宅の応接間にかけているものです。



（注：「天地有情」は1899年発表の土井晩翠の有名な詩集名）



## 全学教育と自分

農学研究科教授 大久保 一 良

退官を2年後に控え、着手している実験に可能な限り多くの時間を割きたく、できるだけ諸事を回避する昨今である。しかし、全学教育実施計画委員、大学教育センター運営委員として二年間すごし、全学教育実施計画委員会の将来計画小委員会委員長、同外国語委員会委員を務める立場にあって全学教育を身近に感じている一人でもある。しかも、全学教育改革検討委員会が本学の全学教育の新たな方向を検討中の時でもある。この動向をみながら、工学部の10月入試を念頭においた完全 Semester 制の実施が本小委員会に諮問されており、外国語委員会と接触しながら、その対応策として初習外国語の一部2, 3 Semesterの開講案を模索・検討しているところである。全学教育について執筆を依頼されたものの、定義を正確に把握しているとは言えない全くの素人である。研究余命の少なくなった自分を顧み、人格というか、人生の方向を見る目が養われ、進む姿勢が定まったのは何時頃だったかと考えると、どうも全学教育を受けた頃の影響が最も大きいように思われる。そこで視点を変え、たまたま本学出身であることから、42年前に私が経験した全学教育と、現在講義している3年次学生に終えたばかりの全学教育への感想を求め、比較を試みることにした。

昭和32年に小松島の下宿から東北予備校に一年間通い、本学に42年前の昭和33年に入学した。今でいう全学教育（当時の呼び方は？）で一年留年した後、三、四年に進んだ当時を思い出してみた。昭和33年から秋保電鉄バスで桜のきれいな富沢キャンパスで全学教育の講義を受講した。全学教育が人格形成の期間と考えるのは、学部の壁を越えて広く触れ合いをもてた当時の学友から最も大きく影響を受けたように思えるからで、今日の自分にとって、現在熊本大学医学部教授、岐阜大学農学部教授、本学工学部教授をしている彼等との出会いが重要であったことを示唆している。また、ホップ畑での小野先生（生物学）、八木山峡谷での化石散策に参加した時の清水先生（生物学）、仙台の地層に詳しい奥地先生（地学）、宮城一女から赴任したての熱気溢れる御園生先生（数学）、揺れるバスの中で化学構造式を暗記している化学の先生等、42年後の今でも鮮やかに脳裏に蘇る。学問をしている真摯な先生方を肌で感じ得る距離の重要性が示唆される。教養部の先生方が各学部に分属し、川内に研究室を持つ先生方が非常に少なくなっている。1, 2年次の全学生が教官の研究室が少ない川内で全学教育を受けている。全学教育の定義を論じる以前の、教育に関する基本的な間違いをしていないことを願う次第である。

当時は英語の読解と文法が中心で、現在重要視されている実践的英会話は殆どなかったが、先生方がその領域の学問にも熱中されていたことは察せられた。米国留学での2年間、貧しい語彙で流暢な会話で過ごした訳ではなかったが、専門用語を駆使して講義の任は果たせ、議論にも参加し、英文の原書もそれなりに書くことができた。実践的英会話の重要性は理解できるが、大学における英語教育

の座標軸は英語本体の理解にあると思われ、学ぶべきは日常会話の巧みさを身につけることではないと思われる。第二外国語はドイツ語を選択した。その理由は当時、化学と医学には通用する語学であったためである。数年前まで机の本棚にはドイツ語の辞書があったが、今ではどこか片隅に投げ出されている。第二外国語は選択とし、必修である必要性を自分は感じない。むしろ、英語を強化した方が卒業後も必要とされる生きた素養となり合理的と考える。

当時、高校では化学、生物、地学、物理のいずれも履修しており、全学教育でも講義と実験は理解できたように思われる。その後、農学部では地学は必修でなくなり、現在、物理が問題になっている。現在、必修である物理と実験は、農学部における長い経験からも必修である必要はなくなったように思われる。当時の片平キャンパスには理学部があり、その化学の講義室で、教官が教卓の上で簡単な化学実験を演じてくれた。とても印象的に思い出す。化学、生物、物理および地学実験の文系への開放が考えられているようであるが、教官による教卓実験程度で充分のように思われ、理系とは明確な線引きをすべきではなかろうか。実験こそ専門につながる重要な手法であり、先々の知見を得る王道であり、理系の本命でもある。

また、講義内容については憶えがない歴史、文化論等の各先生方の面影も脳裏を去来する。先生方の学問への真摯な態度が如何に大切だったかが伺われる。何故か成績が悪く、進級できず、留年してしまい、明善寮から新キャンパスである川内でやり直すことになった。朝、寮を出て、途中の映画館、パチンコ店にひっかかることもあったが、うまい具合に新学科である食糧化学科に進学することができた。留年の痛手を心理相談室で相談した結果、浪人・留年の気持ちをわかっただけでも収穫であると言われたことを覚えている。本学でも登校拒否が問題になってきたが、その本体は人格的成長を拒否しているところにあるように思われる。40年ほど前の小生も浪人・留年の時が最も危険であった。しかし、これを助けてくれたのが、先輩であり、後輩であり、学友であった。自由闊達な人間関係を育てるような環境がキャンパスには必要である。全学教育で学べることはその講義内容、実験内容を介して教官、学友から得られる精神的な絆がとても大切であるように思えてならない。一年遅れたため、同期となった学友には筑波大学教授、信州大学農学部教授、宇都宮大学教授、本学農学部教授がいるが、彼らも同様のことを実感している。

以上が42年前に受けた全学教育と自分である。現在の学生さん方は全学教育についてどのような感想をもっているか気になったことから、講義を聞いている学生55人に「全学教育と自分」と題して感想文を書いて頂いた。その中から気になる箇所を抜粋し、当時との違いをまとめてみた。但し、農学部の学生で、小生の必須科目である「食品生物工学」を受講している学生さん方である。

全般：「一般教養のような面白そうなことを色々とれたことはよかった。しかし、自分に関係ない科目には興味がわかなかった。自分の視野を広げるきっかけとなるのが全学教育である。専門と関連ある一般教養を、学部の特色ある全学教育もある。専門につながる全学教育にしてほしい。」

語学：「英語を強化すべきである。専門で役に立ちそうな生物系や化学系の英文読解を取り入れてほしい。高校の延長ではない実用的英語を習いたかった。高校の延長が圧倒的である。それ以外の外国語を2年間は長すぎる。」

ドイツ語：「1, 2セメで基礎、3, 4セメで外国人である先生の実用的な会話中心の授業、とっても楽しかった。やはり興味が湧くような授業だと行くのが楽しみになります。」

中国語：「他大学での開講数に比べて全く少ない。昔からのドイツ語教育がはびこっていて、中国

語の入るスキ間がない。中国語はとてやる気を持って受けることができた。」

物理：「必修にする必要はない。そのお陰で留年という結果になった。高校の時に物理学を学んでいなかった人もいるわけで、それでいて大学で難しい物理の授業を受けて、基礎も理解していないのに何の必要があって、物理の授業をしているのか、と何度も思った。物理学実験についても同様、農学部生がやるような内容ではなかった。」

交友関係：「他学部の人とも顔を合わせることができ、友達もでき、自分の生活の幅が広がった。サークルでの他学部の人達との親交などで、全学教育の期間は、勉強以外では、自分次第で一生の思い出を作ることができる数少ない期間である。」

### 「曙光」（しょうこう）の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読まれたい。他にも類書は数多くある。

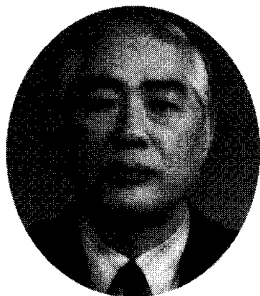
君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える草はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

（命名及び表紙題字）前東北大学総長 西 澤 潤 一



## 全学教育担当の思い出



## 教養部の思い出と全学教育

情報科学研究科教授 國 分 振

全学教育の思い出について書くようにとのことであったが、文字通りの全学教育は「心の科学」という科目を担当してまだ授業中なので、思い出といわれてもちょっと書きにくい。とりあえず書き出しは全学教育の前身・教養部教育のそれも自分が学生として受けた教養の授業の思い出から始めることをお許しいただきたい。個人的な回顧談だけに終わるつもりはないが、どうもそこから始めないと思い出のページがめくれない。

昭和31年の入学であったが、当時の教養部は桜の名所三神峯にあった。一年先に入った友人は「『桜にだまされるな』ということばがあるんだ」と忠告してくれた。そして「まともな奴は授業になんか出ないで、図書館にこもるんだ」と先輩面であそぶのだった。たしかにすべての講義が面白いわけではなかった。「万葉集は当時『マニェプシ』と発音されていた」という説明を「それがどうした」という感じで聴いていたことをいま急に思い出したが、扇畑先生の名講義を十分受けとめる能力がこちらにはなかったのだ。40数年前の記憶の断片が次つぎと浮かび上がってくる。「ドーンズスコトウスはぁ・・・」と大声を張り上げているのは哲学の古田先生だ。人生如何に生きるべきか哲学こそ手がかりを与えてくれるのではないかと期待した講義なのに、世界は火と水と土からできていると考えたとか誰かが風をそれにつけ加えたとか、

そんなことはやっぱり「それがどうした」なのだった。何故そのように考えざるを得なかったのかこそが問題なんじゃないかとも思った。ワイゼンの法学も人気があって「旧制二高生は赤点を取ると『英雄色を好む』と胸を張った」、そこでワーッと受けるのだが、学生のほうは去年のノートを持っていて、そろそろ出るぞという予測が当たったので喜ぶのだという話もあった。袋路通行権とか隣家の柿の枝が伸びてきて実を付けたら取っていいかとか身近な話題を漫談でつないで、試験は「人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期・・・」という刑法第199条を暗記すれば単位をくれるということだった。が私は人が人を死刑にできる根拠は何かなどと考えていて、条文には興味がなかった。目からウロコの思いで聞いたのは矢木先生の経済学と安倍先生の心理学だった。世界観・人生観への手がかりが得られそうに思えた。安倍先生の心理学は、ほとんど犯罪心理の話題で、先生が面接した宮城刑務所の大物たちが友達のような親しきで登場する。羽織のシンというすりの親分はすれちがいざまに羽織を脱がせとるが、すられた本人は気がつかない。そのようなケースを、生きているとはどういうことかというような文脈に織り込んでの壮大な講義であった。それは先生の社会心理学の体系がまとまり世に問われた時期だった。「社会心理学」はその年出版されたが、お話しはよく分かり減法面白かったのに、ご著

書のほうは難解で何度試みても途中で挫折し読み通したことがない。

さて、学生時代の回顧はこれくらいにして、教師としての思い出をたどることにする。大学院を出て助手になった年、教養部の教授が急逝されたので、ピンチヒッターとして例外的に助手ながら心理学の講義を担当した。そのあと新潟大学に9年間勤め、昭和51年に教養部に戻った。心理学実験と講読、それと心理学ⅠおよびⅡを担当することになった。新潟大学で大学紛争を経験してきたが、こちらではその嵐がまだ吹き荒れており処分解除闘争が酷であった。やがて紛争もおさまり学生との関係も正常化した。辛い思い出もある。ひとつはクラスの学生の交通事故死で、秋田から夜中駆けつけたご両親の嘆きと悲しみには慰める術もなかった。川北の自習室の時計と棚は父上が万感の思いを込めて寄贈されたものである。もうひとつは授業の縁で関わった、友人もなく孤独のうちに挫折した学生のこと、マイクを使っての授業を聞いてアパートに戻り結局一日中誰とも口をきかなかったというような生活を続けているうちに、精神の変調をきたしてしまった。訪れた部屋にはインスタント食品の包装が散らばり、流し台は凍てついていた。この荒涼と孤独では落ち込むほかなかったろうと痛ましい思いを強くした。サークルや少人数クラスは精神保健の面からも必要である。居場所が必要なのだ。クラ

ス担任も何回かしたが、クラスにも個性がありまた教師との相性もあるようだ。理学部のあるクラスときは、よくコンパもしたし、一緒に蔵王登山をし山小屋では水汲みもさせられたが、楽しいクラスだった。

さて、肝腎の講義のほうだが、「心理学Ⅰ、Ⅱ」は、全学教育科目では、「心の科学A、B」となった。改革のとき心理学は既にセメスター的にやっていたし、内容的にももともと総合科目的なので大きく変える必要はないという判断だったが、科目名は変えた。精一杯やってはきたが、自分がインパクトを受けた安倍先生の講義を思い浮かべるとき忸怩たる思いを禁じ得ない。自分では役者が違うといたいだが、学生にしてみればそんな弁解は聞きたくないだろう。心理学の各領域についてバランスを考え話題を選ぶとか、毎回資料を配布するとか、OHPやビデオを使うなど受講生の立場に立って講義しているつもりだが、はたして効果はどうだろうか。先般報告書が出た学生による授業評価ではこちらの意図はしっかり受け止められているようだった。

GENERAL EDUCATIONは將軍教育と翻訳すべきだという人もいるが、教養教育には、その学問領域の情報を伝えるだけではなく、学問的真実、人格的価値への憧れを育てる機能もあると思う。



## 「全学教育科目」の役割

理学研究科教授 蟹澤 聰 史

1955年の春、初めて東北大学の講義を受けました。45年も前のことです。その頃、工学部生のための第二教養部は片平の一角にありましたが、他の1・2年生は三神峯の第一教養部に通いました。今の理学部核理学研究施設のあるところですが、教室も先生方の研究室も古びた木造でしたが、春から秋にかけてはとても長閑で良いところでした。しかし、冬は蔵王おろしが吹き抜けるような状態でした。

今は、一般教育は全学教育と改称され、その中に転換教育というのがあって、受験勉強に疲れ果て伸びきったゴムをリフレッシュする役目をするものと言われますが、当時は全てが転換教育そのものでした。ですから、当時の先生方のお名前も講義の内容も覚えています。特に、専門にあまり関係のない文科系の授業に興味がありました。とても个性的で風格のある先生方ばかりでした。これこそ大学なのだと思えました。この辺の事情は学報に紹介しました。

地学実験の受講者は10人ほどで、竜の口や太白山に出かけ、帰りには先生方から果樹園やイチゴ園でご馳走になったりしたものです。化学実験では、都市ガスがまだ入っておらず、石油を気化させてバーナーの燃料にしていました。みな手作りのものばかりでしたが、面白く実験が続けられました。

1957年には第一、第二教養部が統合され、続いて川内に移転して川内分校に、さらに1964年には教養部となりました。米軍が撤退した跡の兵舎、教会、将校クラブなどの木造の建物が教室や研究室として利用されました。今でも当時

の名残の白い建物がいくつか残っています。その頃、私も運良く助手として教養部に採用されました。その直後、教育学部の教員養成課程が宮城教育大学として分離され、理学部や工学部も青葉山に移転しました。川内のキャンパスも次第に整備され、実験棟・講義棟や研究棟が完成しました。しかし度重なる大学紛争によってキャンパスは荒廃し、実験棟も研究棟も封鎖され、教育も研究もままならぬ日が続きました。この頃、全学の中で教養部教授会がほとんど一手に学生問題を引き受けていたのです。教養部改革をしなければとの声が次第に揚がり、教授会の議題に毎回取り上げられましたが、実際に改革が実現したのはそれから20年以上も経ってからでした。

この間、学生の数も増え、気質も変わりました。カリキュラムの改訂により、パンキョウと揶揄されて人気のなかった一般教育も全学教育と名称が変わり、それぞれの科目の名前もちょっと聞いただけでは何をやるのか分からないようになりました。今はその名前の示すとおり、大学全体を挙げて全学教育に取り組むようになっています。名実ともにそうあって欲しいものです。一方で、教養部が消滅して7年、川内キャンパスからはほとんどの理科系教官が姿を消してしまいました。先生方は自分の講義の時間だけ川内に現れて、終われば研究室に戻ってしまいます。希望に燃えて入学した1・2年生は講義のとき以外は先生との接触もままならぬようになりました。学生実験棟の整備などは毎日のように行う必要があるのですが、どうなので

しょう。川内キャンパスと青葉山とを往復する学生諸君は、とくに冬道などではいかにも危険です。

今では講義室も実験装置も整備され、ビデオやL1など視聴覚機器が導入され、先生方も講義ノートを手帳で作り、いろいろな資料を加えて学生に配布するようになりました。おそらく、先生の話を一語一句聞き漏らさずに必死になってノートを取るという光景はもうないのではないのでしょうか。それはそれで、とても分かりやすい講義ができていいのですが、学生はプリントを貰うと全て分かった気になり、授業にはでているのに無気力に漫然と聞いているだけのように思えて仕方がありません。

最近は何が能率主義というかすぐに役立つものばかりを追い求め、基礎科学や人文科学などが疎かにされている風潮がありますが、一見無駄なことに見えるなかに、実は人格形成にとっても重要なことが含まれているのではないのでしょうか。若い柔軟な頭の時代に、直接専門には関わらない講義を聴いたり、友人と議論したりすることが必要なのです。これからは環境・エネルギー問題、遺伝子操作、臓器移植などを避けて通るわけにはいかないでしょう。新しい世紀を目前にして、人間性回復の方向を模索しな

ければならないことを実感します。全学教育でもっとも必要な領域だと思います。

一方で、学部や大学院に進学した学生を見ていると、自分でテーマが見つからずひたすら指導教官のお達しを待つ、実験も自ら汗してデータを出すことをせずに、専らパソコンに向かってなにやら図を描くといった光景が見受けられます。リンゴの皮むきもできず、マッチの擦り方も知らず、ましてハンダ付けやガラス細工で手作りの装置を組み立てることができないようではとても創造的な科学は考えられないでしょう。私の専門では、岩石や鉱物の分析をよく行いますが、最近は高価な機器分析が幅を利かせています。その基本になるのは面倒な重量分析で得られたデータであることを知らない人が多くなっています。また、フィールドワークなど、地味で時間のかかる研究も必要なのです。東北大学の学生諸君はこのような泥臭い仕事をものともせずに取り組むという気概を持っていただきたいと思います。また、このような方向の重要性を若い学生諸君に認識させるような教育こそが真に独創的な伝統を守るものであり、「研究第一主義」とは、現場の研究者が第一線で研究に取り組む姿勢を通して教育を行うことによって維持されるものではないのでしょうか。

## 大学教育研究センターの紹介

東北大学では平成5年4月から新カリキュラムに則った教育が行われています。すなわち、これまでの一般教育科目及び専門教育科目の区分を見直して、教育内容に応じて「全学教育科目」と「専門教育科目」に改編し、できるだけ4年ないし6年の一貫したカリキュラムを目指すと共に、カリキュラムの選択に多様性をもたらすなどの目的から semester 制を採用しました。またこれまでの教養部制度を廃止し、一年生は入学当初から各学部にも所属することとなりました。

「全学教育科目」は全学の教官が協力して担当することとなり、その効果は教育を活性化し、教育の多様化をもたらすものと期待されています。近年の、急激な科学技術の発展、学術研究の高度化・細分化、社会の変化、国際化の進展等に伴い、大学教育のあり方も絶えず問われております。したがって、大学の特色あるカリキュラムを時代の要請に応えつつ編成するには、大学教育に関する不断の情報収集と分析、その成果のカリキュラムへの反映が求められております。

大学教育研究センターは、この要請に対応して(1)全学教育科目の企画・実施組織(2)大学教育に関する研究組織、の二面性を保有する学内共同教育研究施設と位置づけられています。

同センターでは「全学教育科目」を開講しています。その新カリキュラムの理念としては(1)狭い専門領域に捉われない広い視野と柔軟な思考力を養う役割(2)専門教育のための基礎的素養を養う役割(3)大学教育のイニシエーションの役割、を挙げることができ、具体的には、「転換教育科目」、「教養教育科目」、「基礎教育科目」、

「外国語教育科目」、「保健体育教育科目」にそれぞれ反映されています。

以下に、それぞれについて説明します。

○転換教育科目は、上記理念(3)の役割を大きく取り入れた科目です。すなわち、新入生の期待と意気込みに応え、学習意欲を高め持続させるために必要な情報の提供と、これらの大学生活に向けての意識改革を促すための教育なのです。

この科目は、次の2つに分けられて、主に1年次学生を対象にして実施されます。

(1) 転換教育科目A：学部ごとに、所属学生を対象に開設する授業科目です。

「教育の現在」、「経済学入門」、「現代数学入門」、「肉眼解剖学」、「歯の解剖学」、「薬学セミナー」、「創造工学」、「現代における農と農学」などがあります。

(2) 転換教育科目B：学部にかかわらず、所属学生以外をも対象に開設する少人数の授業科目です。

「行動科学の考え方」、「くらしと技術」、「社会への視座」、「インド学入門」、「行動科学の考え方」、「ヨーロッパの歴史と現代」などがあります。

○教養教育科目は、上記理念の(1)の役割を取り入れた科目です。すなわち、人文、社会、自然科学の諸領域の思考方法などを幅広く学ぶことによって、専門に捉われない広い視野と柔軟な思考力を養うための教育として位置づけられます。

この科目は、次の5つのカテゴリーに分けられています。

## (1) 複数文化と国際事情

「英米文化論」、「ドイツ語圏言語文化論」、「ロマンス・スラブ言語文化論」、「日本語特論」

## (2) 言語・思想・歴史の探究

「言語表現と文化」、「論理の世界」、「思想の世界」、「歴史と文化」、「サンスクリット語」、「ギリシア語」、「ラテン語」、「アラビア語」

## (3) 人間と社会の科学

「心の科学」、「芸術の世界」、「宗教の科学」、「文化人類学」、「法と社会」、「政治と社会」、「経済と社会」、「社会の構造」、「社会と地域」、「都市と地域の科学」、「地域と環境」、「日本国憲法」

## (4) 自然の理解と分析

「数学の世界」、「社会の数理」、「物理学の進歩」、「フロンティア物理学」、「物質の科学」、「環境と生活の化学」、「バイオサイエンス」、「宇宙の科学」、「地球環境科学」、「情報処理概論」

## (5) 総合科目

「東北から考える」、「くらしのなかの化学」、「人体の構造と機能」、「人間の機能に迫るテクノロジー」、「ものをつくる」、「社会と大学生」、「身近な病気の基礎知識」、「記号を読む一言語・文化・社会」、「東北アジアの社会・文化・自然」

なお、このほかに、外国人留学生のための教養教育科目として「日本事情」が開設されています。

○基礎教育科目は、上記理念の(2)の役割を取り入れた科目です。すなわち、専門教育科目の学習に直結する科目及びこれと隣接する科目として位置づけ開設されています。

## (1) 数 学

「数学」、「数理統計学」、「解析学」、「常微分方程式」、「線形代数学」、「数学物理学演習」

## (2) 物 理 学

「物理学」、「物理学特論」、「天文学」、「地球

惑星物理学」、「物理学実験」

## (3) 化 学

「化学」、「化学実験」

## (4) 生 物 学

「生物科学」、「生物学特論」、「生物学実験」

## (5) 地 学

「地圏環境科学」、「地理学」、「地球物質科学」、「地学実験」

## (6) 情 報

「情報処理概論」、「情報処理演習」

○外国語教育科目は、外国語の読み、書き、話し、聞くという4要素について、既に習得した外国語の能力を高めること、初めて学ぶ外国語の基礎を身に着けること、及び外国語の学習を通じて外国文化に接し、それによって外国文化を理解する能力を高めることを目的として開設されています。

科目として、以下のものが開設されています。

- (1)英語(2)ドイツ語(3)フランス語(4)ロシア語  
(5)スペイン語(6)中国語(7)朝鮮語

なお、このほかに、外国人留学生のための外国語教育科目として「日本語」が開設されています。

○保健体育教育科目は、スポーツ実技による健康な身体を造るだけでなく、運動理論、健康教育、更には文化的な要素を含む広がりのある教育を行います。

開設する科目は、次のとおりです。

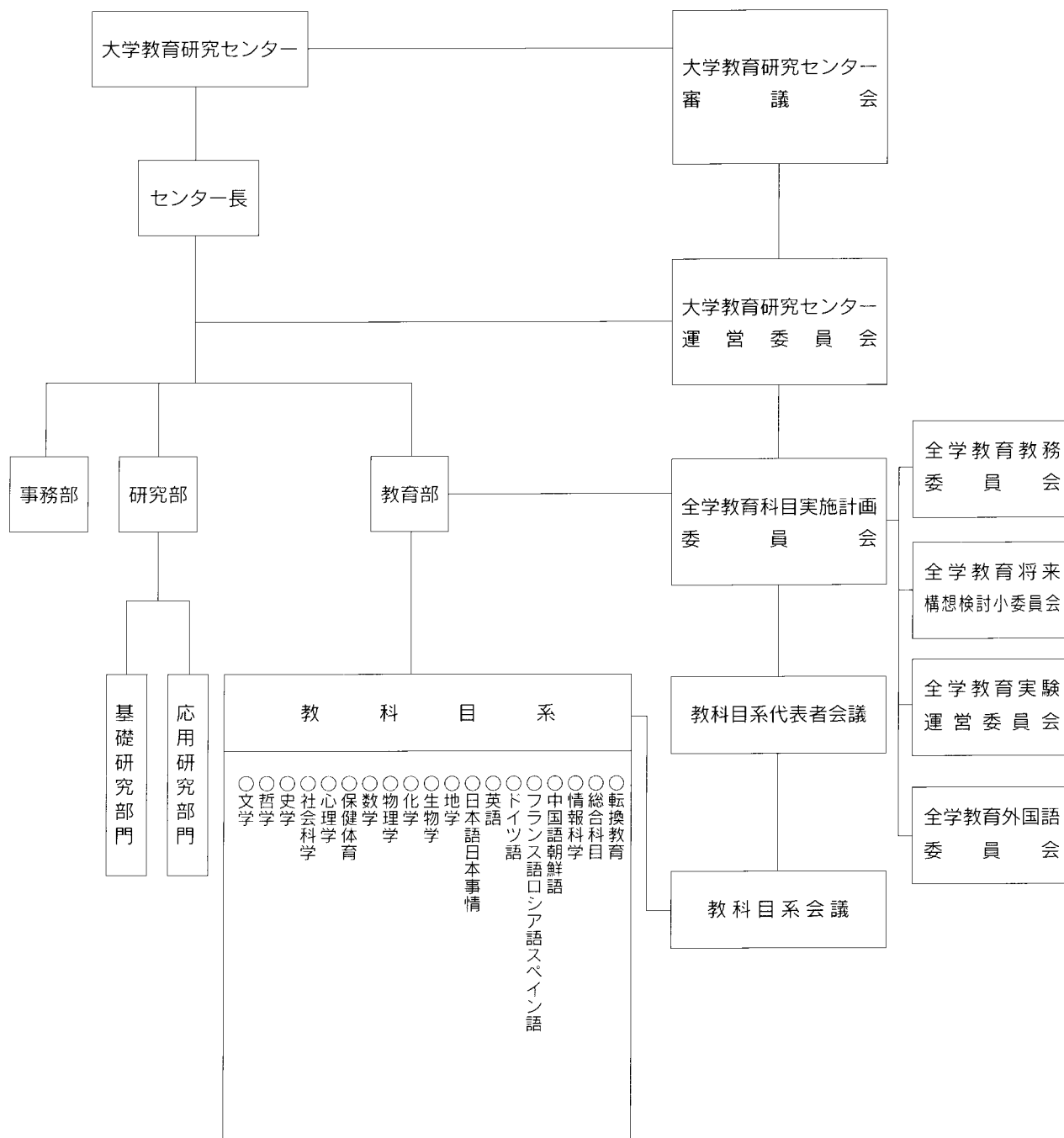
「スポーツの科学」、「身体の文化と科学」

○資格取得のための科目は、教員免許状取得のために、次のものを開設しています。

「教育原理」、「教職論」、「教育課程論」、「教育心理学」、「人間関係論」、「相談心理学」

以下に、大学教育研究センターの組織図を示す。

## 大学教育研究センター組織図



## 学生からの投稿



## 全学教育科目について

文学部2年生 小 山 美 雪

今まで2年間全学教育科目を履修してきて、後悔していることがたった一つだけある。それは、外国語、特に英語をもっと真面目に勉強すべきだったということである。英語とは中学校入学以来約8年間も付き合っていることになるのだが、大学に入学してから週単位の講義回数が減り、またセメスター間に長い休みが入ったりして英語に触れる機会が減り、また触れる時間も短くなったため、読解力は高校の時よりも確実に落ちてきているようだ。さらに絶望的なのが英会話である。語学を学ぶ上で、文章をきちんと読むことができるようにする、というのはやはり大切なことではあるが、もっと重要なのは自分の気持ちを言葉で表現し、相手との意志の疎通をはかること、すなわち会話ができるようになるようにすることだと思う。だが実際のところ、もっともらしいことを書いてはいるが、悲しいことに私自身はいまだに『英語を読めても話せない日本人』の一人だということ認めざるを得ない。今まで大学で受けてきた外国語教育、特に英語を振り返ってみると、依然として読む・書くといった分野に偏っているような気がする。私が選択したカリキュラム上そうってしまったのかもしれないが、高校の授業の延長という雰囲気、ただテキストを読み進めていだけという講義が多かった。もちろん受け身的な姿勢で講義に参加しているだけだった私にも非はあるのだが、学生が興味を持って参加できるよう、使用するテキストや講

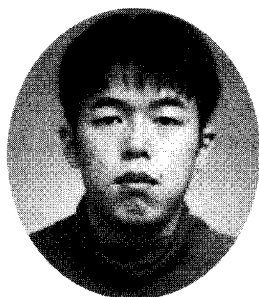
義内容にもう少し工夫がなされていいのではないかと思った。

大学でなされる全学教育には、教養教育科目というものもある。教養科目では、高校の時に習っていた地理や地学の知識を使うような講義、今まで全然触れたこともないラテン語、心理学関係の講義など今専攻している分野には関係ないものの自分がいくらか関心持っている講義を選択することができた。専門知識だけに偏りすぎないようにするためにも、様々な領域の講義を聞くことは望ましいと思う。

また保健体育も全学教育に含まれるのだが、私は大学にも保健体育があるとは知らなかった。これは驚きだった。もっと驚いたのは選択できるスポーツの種類が多いことである。バレーボールやサッカー、またゴルフやエアロビクス、トレ・レクなど珍しい物も含めて十四もの選択肢があるが、希望者が多い場合、抽選にもれると希望通りの種目を履修できないこともある。私もゴルフに落選してトレ・レクを履修することになったのだが、青葉山を走るというきつい授業があったものの、インラインスケートやボーリング、スケートの授業もあり、楽しい経験をすることができた。

三年生になると専門科目を主に履修することになるが、今まで全学教育科目で学んできた知識を無駄にしないよう、英語をはじめとした様々な分野の知識を引き続き積極的に取り入れていこうと思う。





## 「全学教育科目を学んで」

工学部4年生 橋 詰 浩 明

大学に入ってから初めの2年間は、川内北キャンパスで専門教育を受ける前の基礎となる全学教育科目を受講しました。卒業を間近にした今になって考えてみると、私が大学教育センターで学んだ2年間は、高校を卒業してから大学に入学して、仙台という街に慣れ親しむためには必要かつ十分な時間であったように思います。それと同時に、将来学ぶ専門分野についていろいろと考えさせられた期間でもありました。

私にとっての大学とは、親元から離れ、社会人として一人前に独立するための大きな土台となるための場所であったように思われます。なぜなら、学生という身分は自由にできる時間と、そこで自分のやりたいことを試すことができるチャンスが与えられていたからです。だからだと暇な時間が過ぎていく、いかにも無駄な時間を過ごしているような感じがする全学教育科目の授業が行われる川内北キャンパスでの2年間は、まさにその絶好の場ともいうべきものでした。

全学教育科目の授業を受けて感じたことは、高校までの授業とは違い、教官と学生とのコミュニケーションがほとんど無いことです。教官が学生に呼びかけるようなこともなく、どうしても受け身がちな授業となってしまう、自分で納得しながら授業を進めていく必要があります。解析学Ⅰや解析学Ⅱなどの数学の授業では、教官は教室に入ってくるや否や黒板に数式をただ羅列するばかりで、学生は黒板と対話するような授業となります。学生が自主的に理解しようとしなければ、このような授業にはついていけず、中にはサボる学生まで出てきてしまうほどです。当然、「もっと学生を理解させるような授業をしてほしい。」という学生の声が

多数あります。自分の研究に忙しい教官が多いことも分かりますが、一考願いたいことの一つです。

授業に出席して自分で勉強していかないと、どんどん置いてかれてしまうことになってきますが、そういうことでは、大学教育センターでのせっかくの2年が無駄になってしまいます。完璧に理解できないまでも授業にはきちんと出席して教官の話ぐらひは聞くように心がければ、授業に出ないよりはかなり理解度も変わってきます。私も様々な講義をただ聞いていただけでしたが、それでも十分専門教育科目の授業で役に立ったと思います。

全学教育科目には、興味の湧くような授業もあるにもかかわらず、受講できなかったという問題もありました。具体的には、工学部の場合はカリキュラムの関係上、ほとんど授業には選択の余裕がなかったのです。クラス単位で設定されている数学や物理などの基礎教育科目を受講しようとする、他に受講したい教養教育科目の授業が同じ時間帯にしか開講されていないのです。履修することができる授業科目は必然的に決まってしまう。第二外国語にいたっては、ドイツ語以外は履修できない状況でした。本来、学部の枠を越えて、幅広い教養・知識を身につける授業を受けられるのが大学教育研究センターのあるべき姿であり、設置の目的だと思います。

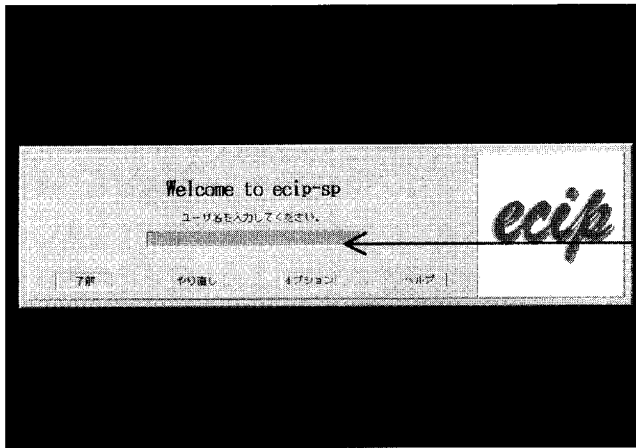
新入生の皆さんには、自分を成長させる意味においても全学教育科目は大事だと思いますので、無駄なこととは考えず、授業には欠かさず出席してほしいと思います。

## 電子化シラバス検索方法について

平成12年度入学者（1年次学生全員）に、情報処理教育センターの計算機を利用するための利用者番号が配布されます。

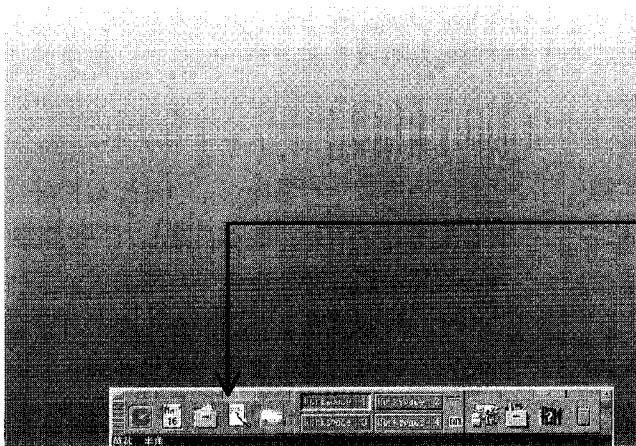
ここでの説明は、電子化シラバスを見るためだけの操作方法です。

①



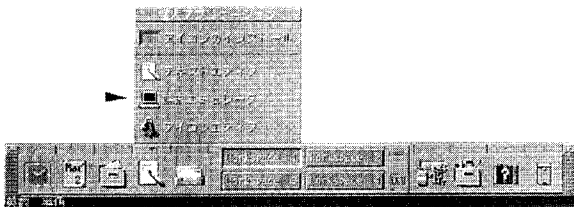
- ここに**利用者番号**を入力
- ↓
- **パスワード**を入力
- ↓
- コメントにしたがって進めてください。

②



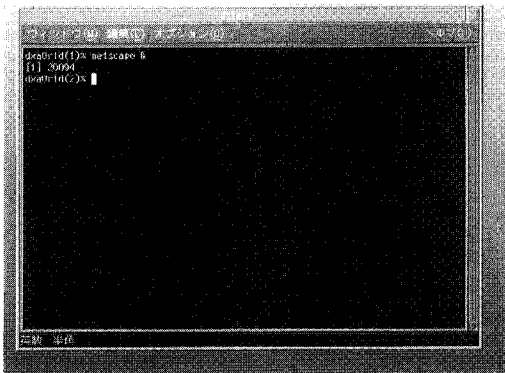
- フロントパネル上部、左から四つ目の枠にある三角のボタンにカーソルを合わせマウス左ボタンを Click するとすぐに上にメニューが表示される。

③



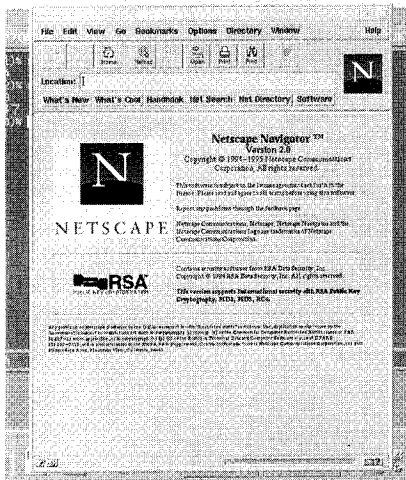
- 表示されたメニュー「**端末エミュレータ**」の所でマウス左ボタンを Click。

④



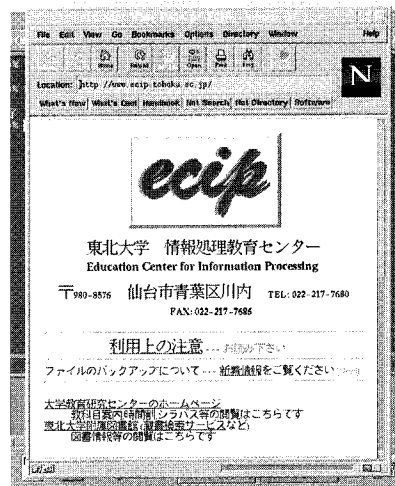
- 端末エミュレータのプロンプト (xxxxxxx%)  
に続けてキーボードから netscape & と入  
力し Return キーを押す。  
↓  
(&の前に半角スペースを入力)

⑤ • この画面上で (どこでも) マウス左ボタンを Click.

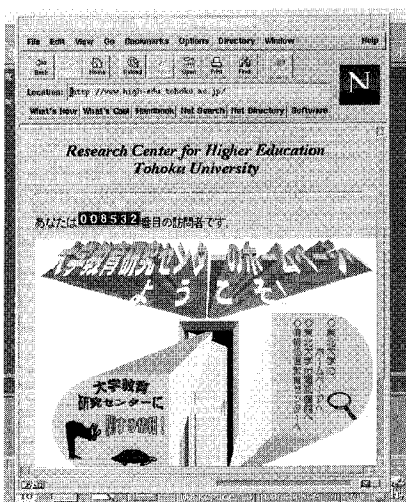


⑥



- 情報処理教育センターのホームページにな  
る。  
↓  
• 「大学教育研究センターのホームページ」の所にカー  
ソルを合わせてマウス左ボタンを Click.



⑦



- 画面左側「大学教育研究センターに関する情報」の  
所にカーソルを合わせマウス左ボタンを Click.  
↓  
• 次画面が大学教育研究センターの目次です。  
「時間割からシラバスへ」のところにカーソルを合わせ  
てマウス左ボタンを Click し、コメントにしたがって進  
めて下さい。

• リンクが張ってある場所では  が  の  
形に変わります。

(時間割に変わる画面では、多少時間がかかります。)

## CLEAN FRESH CAMPUS

学生有志のボランティアによる教室等の清掃が行われています。

川内北キャンパスには、毎日5,000人を超える学生が集まり、学生生活を送っています。

このキャンパスには、講義棟3棟、実験棟、体育館を始め様々な建物があります。特に、講義棟は沢山の授業課外活動にも利用されているため、利用の頻度が非常に高くなり、清掃作業が追いつかず（また、清掃の時間が取れず）、学生アンケートでも「教室が汚い」という意見が出ています。

このような状況で、「快適な教室を」と、教室内に散らかった空き缶やビラ、黒板などの清掃が、学生のボランティア活動により実施されています。

この活動は1月から教室の利用が終わった夜遅く、週に2回のペースで実施されてきました。しかしながら、教室利用の終了後となる活動時間帯の制約などから、まだまだ、空き缶やゴミの散乱が見受けられる教室もあります。

学生諸君の一人一人が「ゴミ・マスターズ」となり、快適に受講できるよう、ゴミやビラの散乱がないキャンパスになるように心掛けて欲しいものです。

今後も引き続きこのボランティア活動が継続されることを期待します。

写真は、センター長を囲んだ第1回目活動の参加メンバー。

(担当：全学教育教務第一掛)



発行 東北大学大学教育研究センター  
Research Center for Higher Education,  
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内

インターネットホームページアドレス <http://www.high-edu.tohoku.ac.jp/>